

NHK for School を活用した深い学びを生み出す授業デザインの工夫

—学習スタイルによる教師の支援の違いに着目して—

浅村芳枝（下松市立久保小学校）・安井政樹（札幌市立新琴似北小学校）
水野宗市（宮崎市立宮崎東小学校）・松浦智史（守口市立梶小学校）
谷田健司（湯梨浜町立東郷小学校）・堀田博史（園田学園女子大学）

概要：新学習指導要領で求められる深い学びの実現を考えたとき、児童生徒の学び方に合わせた、適切な支援をする必要がある。本研究では、大阪府放送・視聴覚教育研究会の先行研究をもとに児童生徒の学び方のスタイルを3つに区分し、このスタイルの区分による教師の工夫の違いについて明らかにした。まず教師が学級の学習スタイルの状況を把握し、それに対応した支援を考えながら授業実践を行ってきた全放連の「深い学びの実現に向けた放送学習プロジェクト」の実践成果報告書（2018）を分析した。その結果、学校放送番組を活用した授業における、学級にどのスタイルの児童生徒が多いかによる教師の工夫の共通点や相違点が見えてきた。

キーワード：NHK for School, 学習スタイル, 視聴のタイミング, 教師の工夫

1 はじめに

新学習指導要領が求める深い学びの実現を考えたとき、教師は児童生徒の学習スタイルに合わせた適切な支援をする必要がある。

学習スタイルとは、学習の際に好んで用いる認知活動、学習活動の様式・方法であり、長谷川ら（2011）が先行研究において、以下の3つのタイプを抽出している。

A：学びを意味づけてから行動するのが得意

（熟慮分析型）

B：行動しながら学びを意味づけるのが得意

（試行分析型）

C：時間をかけて学びを意味づけるのが得意

（内観思考型）

学習スタイルと教師の工夫に関する先行研究としては、児童のそれぞれの学習スタイルにどのようなICT活用時の工夫が有効かを分析した堀田ら（2011）の研究がある。

本研究では、全国放送教育研究会連盟「深い学びの実現に向けた放送学習プロジェクト」のメンバーが行った実践を対象として、学校放送番組を活用した授業における学級の学習スタイルによる

授業デザインの工夫について明らかにした。

2 研究の方法

次のように研究を進めた。研究の設計は図1の通りである。

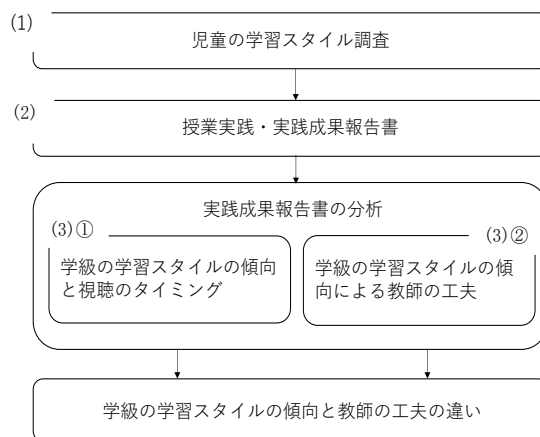


図1 研究の設計図

(1) 児童生徒の学習スタイル調査

■調査時期：2017年9月

■調査対象：全国放送教育研究会連盟「深い学びの実現に向けた放送学習プロジェクト」プロジェクトメンバーが所属する学校の3年生以上の児童生徒

- 調査方法：①質問紙アンケートを実施
 ②教科の単元テストを実施
 ③質問紙アンケート(①)に②の素
 点を記載
 ④データ分析

まず、学級の児童生徒を対象とした学習スタイル調査を授業実践前に行った。この調査では、大阪府放送・視聴覚教育研究会が2011年に開発した「学びの方法アンケート」と「学習スタイル判定マクロ」を用い、児童生徒一人一人の学習スタイルが、Aタイプ、Bタイプ、Cタイプのどの傾向が強いかを調べた。質問紙は、表1の9つの質問に対して、「そのとおり」「どちらともいえない」「ちがう」の3つから最も近いものを選ぶようになっている。

表1 質問紙の項目

1	勉強をするときに、細かくていいに考えるほうだ。
2	どんなことにたいしても、よく見てから行動するほうだ。
3	テスト勉強をするときなど、自分なりのノートの整理を心がけているほうだ。
4	考えるより、まずすぐのためにしてみたくなるほうだ。
5	道具を使ったり、自分でやってみたりする勉強が好きだ。
6	話し合いをするとき、自分から意見を言うほうだ。
7	勉強するとき、困ってしまうことが多い。
8	むずかしい問題をとくとき、どこからやっているかわからない。
9	自分が言ったことややったことをあとでよくよく考えるほうだ。

次に、学級にはどのタイプ傾向が強い児童生徒がどのくらいの割合でいるか、学習スタイルに関する学級の傾向を把握した。たとえば、Aタイプ30%、Bタイプ50%、Cタイプ20%の学級であれば、Bタイプの傾向が強いと考えた。

アンケートの実施に際しては、このアンケートから個を特定することがないように留意した。

(2) 授業実践と実践成果報告書の作成

授業実践者は、この児童生徒の学習スタイル調査の結果を意識して学校放送番組を活用した授業を実践し、実践成果報告書にまとめた。

実践成果報告書(図2)には、以下の項目がある。

- ・授業を実施した学年、教科、活用番組
- ・授業デザイン
- ・学級の学習スタイルと実態と関連したねらい
- ・今回の実践における番組効果
- ・深い学びに関する教師の工夫
- ・成果と課題

図2 実践成果報告書の一例

(3) 実践成果報告書の分析

① 学級の学習スタイルの傾向と視聴のタイミング

「授業デザイン」には、1単位時間あるいは1単元の授業の流れと学習内容が書かれている。ここから視聴のタイミングを調べた。

② 学習スタイルの傾向による教師の工夫

実践成果報告書中の記述から教師の工夫を抽出した。例えば「考えを整理しながら視聴するための一時停止」という記述からは、「課題把握」の際に考えを整理するために「番組の一時停止」という工夫がなされたと読み取った。

工夫の抽出後、これらの工夫が学習過程のどの段階でなされたのかを学習スタイル別に分類した。

3 結果と考察

(1) 学習スタイル調査の結果

全 18 事例のうち A タイプの傾向が強い事例が 1, B タイプの傾向が強い事例が 11, C タイプの傾向が強い事例が 3, A タイプと B タイプの割合が同率の事例が 2, B タイプと C タイプの割合が同率の事例が 1 であった。分析にあたり, A タイプの傾向が強い 1 事例, B タイプの傾向が強い 11 事例, C タイプの傾向が強い 3 事例, 計 15 事例を取り上げ, 「視聴のタイミング」「教師の工夫」という項目で整理した。

(2) 学級の学習スタイルの傾向と視聴のタイミング

学習スタイルと視聴のタイミング (表 2) を見

てみると, C タイプの傾向が強い全ての学級では, 視聴の前に振り返りをしたり, 番組の内容につながる内容について考えさせたりして, 課題把握後に視聴していた。一方, B タイプの傾向が強い学級では, まず視聴して感想を交流するなど, 学習開始後の早い時点での視聴が半数あった。

番組を視聴してから課題把握をしたのは 9 事例, 課題把握後に番組を視聴したのは 6 事例と, 学級の学習スタイルの傾向に関係なく, 全ての学級で課題追究前に視聴していた。このことから, 深い学びを目指して学校放送番組を活用する授業には, 導入や課題把握前後に視聴して課題追究に入るといった共通点があることが分かった。

表 2 学習スタイルと視聴のタイミング

	教科	導入		展開	終末
A	算数	既習内容の確認→ 視聴 ①→ 視聴 ②	課題把握	自力解決→全体での話し合い→ 視聴 ③→答えの確認	振り返り
	道徳	視聴 →感想交流	課題把握	全体での話し合い	振り返り
B	道徳	視聴	課題把握	グループでの話し合い→全体交流	振り返り
	道徳	自己の振り返り→ 視聴 (一時停止)→感想交流	課題把握	問いについてグループ対話→全体交流	振り返り
	算数	視聴	課題把握	課題への取組	形成的評価
	理科	視聴 →グループでの気付きの交流	課題把握	観察→考えの交流	まとめ
	理科	おもちゃの比較	課題把握→ 視聴	プログラミング	気付きの交流
	理科	視聴 (一時停止)	課題把握	グループで整理 (タブレットでの 再視聴, あらすじ) →問題設定	検証計画
	理科	予想	課題把握→ 視聴 →疑問に思ったこと・考えたこと	観察→分かったことのグループでのまとめ→全体でのまとめ	まとめ
			課題把握	観察→ 視聴 →分かったことのグループでのまとめ→全体でのまとめ	
			課題把握→ 視聴 →疑問に思ったこと・考えたこと	観察→ 視聴 →分かったことのグループでのまとめ→全体でのまとめ	
	国語	初発の感想	課題把握→ 視聴	グループでの音づくり→全体での発表	振り返り
	国語	経験の確認→ 視聴	課題把握	番組を参考に紹介方法決定・準備	全体に紹介
総合	既習内容の確認→ 視聴 →感想交流	課題把握	番組をヒントにしたグループでの話し合い→自分のテーマ決定	振り返り	
C	道徳	生活の振り返り	課題把握→ 視聴 →感想交流	全体での話し合い	振り返り
	道徳	番組の内容についての交流	課題把握→ 視聴 (途中でストーリーと問題点の整理)	字幕付きでの 再視聴 →全体での意見交流	振り返り
	社会	チラシから分かる工夫	課題把握→ 視聴 →番組中の工夫の整理	番組以外の工夫→見学	まとめ

(3) 学習スタイルの傾向による教師の工夫

学習スタイルの傾向による教師の特徴的な工夫について表3にまとめた。

番組視聴に関しては、Bタイプの傾向が強い学級では、活動の見通しをもたせる、新たな視点や見方・考え方を獲得させる、番組の感想をもとに問いや課題を作るなどの工夫が見られた。Cタイプの傾向が強い学級では、字幕付きでの視聴という工夫が見られた。

学習形態に関しては、Bタイプの傾向が強い学級において、グループでの交流や対話、コメントなどを通じた考えの共有などの工夫が見られた。

グループ活動でのグループ編成に関しては、Bタイプの傾向が強い学級とCタイプの傾向が強い学級において、児童生徒の学習スタイルを意識してグループを編成するという工夫が1事例ずつ見られた。それぞれのタイプの児童生徒が一つのグループにいるようにすることによって、一人一人の良さを生かそうとする試みである。

授業構成に関しては、Cタイプの傾向が強い学級において、既習事項との関連付け、問いのつながりを意識した授業展開、振り返りを生かしたワークシートなど学びのつながりを児童生徒に意識させるための工夫が見られた。

学習過程に着目してみると、全ての傾向の学級において課題追究時の工夫が多いことが分かる(図3)。

表3 学習スタイルと特徴的な工夫

	番組活用	学習形態	授業構成
A			既習内容の確認 自力解決の時間
B	番組視聴 ・活動の見通し ・観点の獲得 ・見方・考え方の獲得 ・感想から問い、課題 視聴方法の選択	グループでの活動 ・交流 ・対話 ・友達へのコメント	発表の場の設定 自力解決の時間
C	字幕付きの視聴		学びのつながり ・既習事項との関連 ・問いのつながり ・振り返りを生かす

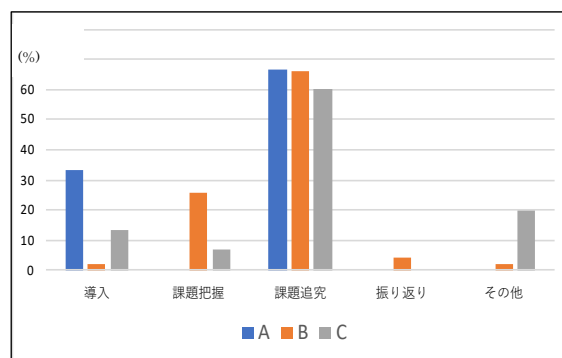


図3 学習過程と工夫

4 成果と今後の課題

児童生徒の学習スタイルに注目することで、課題追究に向けて学級の児童生徒の実態に合わせたタイミングで学校放送番組を視聴させ、課題追究を様々な方法で支援しているという教師の工夫が見えてきた。

今後は、児童生徒の学習スタイルに応じた学校放送番組の見せ方の工夫や番組を活用した授業における工夫だけにとどまらず、タブレット端末などを活用した個別視聴や選択視聴、動画クリップの活用など、NHK for School を効果的に活用した授業デザインの工夫について、さらに研究していきたい。

参考文献

長谷川健治・吉川俊三・久岡淳一・芝崎清治・湯井康二・十河秀敏・堀田博史(2011), 効果的な ICT 活用の提案を行うための児童生徒の学習スタイルの分類, 情報コミュニケーション学会第8回全国大会, pp. 28-29

堀田博史・久岡淳一・吉川俊三・芝崎清治・湯井康二・十河秀敏(2011), 児童生徒の学習スタイルの違いに着目した ICT 活用時の工夫, 日本教育メディア学会第18回年次大会大阪府放送・視聴覚教育研究会「学習スタイルと ICT」<http://kids.sonoda-u.ac.jp/e-housou/> (参照日 2017. 4. 1)

全国放送教育研究会連盟 深い学びの実現に向けた放送学習プロジェクト (2018) 実践報告書, pp. 18-49